

- 1 雷明かりもて繙くや鉞物史
- 2 卯波ただてのひらへ来て返すのみ
- 3 萩の世の風に総国ゆれやまず
- 4 うまごやしさあプロペラになるときぞ
- 5 旅人に風の薊はやさしけれ
- 6 稲原のなかで魚眼の神に会ひ
- 7 声のみの翁つどへり桃の花
- 8 おんおんと沖に叫びの鳥居あり
- 9 鈴投げて小さき雷を賜りぬ
- 10 プラトンの顔せる風が石段に
- 11 木漏れ日に身を屈めれば笹の家
- 12 退化せる魂(たま)の翼よ花あんず
- 13 高つばめ素早く捕れば絵札なる
- 14 鈴の音に寄る鱒がおり深山池
- 15 隣国より盗人の手が瓢箪に
- 16 紫を召し行かれよと蝉時雨
- 17 中空に月光受けの諸手あり
- 18 鯰の目に竜宮の朱(あか)うすく浮き
- 19 葡萄熟れ讃歌の嘆き絶頂に
- 20 花踏まず花野を渡る白足袋よ
- 21 密林に二つ目の月しんしんと
- 22 火へ歩む鹿を最後の秋とせよ
- 23 睡蓮の昼ゆつくりと睡蓮に
- 24 微笑みの清き明るさ昼の火事
- 25 虎描けば後ろの山も紅葉して
- 26 春月光なほ綿菓子に加糖すや
- 27 枯すすき摺むや夢に引火して
- 28 風紋をめくれば黒馬眠りおり
- 29 息かけて空の指紋を拭く人よ
- 30 笑ふたび火糞をもらす神もゐて
- 31 伊勢海老も抱えの楽器に星祭
- 32 松のぼる庭師ふと消へ天竺に
- 33 悲しめばみな紺色やひめりんご
- 34 コスモスに揺れる幽霊船員ら
- 35 地へ垂れる糸ほころびし北斗より
- 36 道の花ぽんと叩けば春の鬼
- 37 緑陰の木椅子に使者の刻みあり
- 38 次々と八百の御顔や鏡焚き
- 39 影流す禁の遊びや月の川
- 40 きさらぎの火の粉が朝を満たすのか
- 41 万劫や深井戸の暦いま起こす
- 42 好きな空を来し者たちに迎へ歌
- 43 七色の魚なら素手で葬らむ
- 44 逝く夏に少年の胸薄きまま
- 45 証とは草一本を通ふ風
- 46 投げ上げて空に遊ばす奇書もあり
- 47 「前略」と付ければすべて笹のはな
- 48 飛行家の手記に挟まりちぎれ雲
- 49 鈴振れど千年は来ず御空舟
- 50 標本にとろとろのまま愚者の石

- 51 三本の箸もて拾ふ豆の影
- 52 盆送る伴(とも)の蜻蛉が抽斗に
- 53 去り際に尊を匂はす足湯客
- 54 生け捕れば彼の百凶譜のぱらどくさ
- 55 薔薇のぞき込み眠るものたしかめよ
- 56 日溜まりに秋の父祖らは宴して
- 57 白昼を自転車乗りの影ばかり
- 58 月の出を待てぬ神影踊り出よ
- 59 日の湖(うみ)にかすか白鳥二羽の跡
- 60 春海のうへ胡坐のみ許されて
- 61 芹青し日輪もまた束ねられ
- 62 鮎食むにただ唇を当てるのみ
- 63 箎に受く天一心の丸御糞
- 64 実柘榴を空へ散らせば漢百字
- 65 霧の日の小径に喫茶「葡萄」あり
- 66 魚の影はしる滅びのウキスキーに
- 67 原母ふと地に空蟬を拾ふとき
- 68 抱き合つて二僧眠れば山胡桃
- 69 林檎割れば時間の臍腑うつくしき
- 70 桃低く実るあたりに楽を聴き
- 71 真鍮の魂(たま)さがしける夏河原
- 72 銀すこし振ればあらはる蝶の道
- 73 合歓遠くとほく異民の囃せり
- 74 朝風呂に霞をまとひ前世妻
- 75 はらわたも絹に包めば秋の雨
- 76 黄昏を股より覗くことなかれ
- 77 菓子焼きの秘密の明かり野の隅に
- 78 老楽師ぼろんと椿を回しける
- 79 裏山の樹を湿らせて哭く岩よ
- 80 孔雀蒸す彩のけむりが朝市に
- 81 旧約の海辺に拾ひ山胡桃
- 82 機械にも飴色の夢ながき午後
- 83 春眠に烏賊の血すこし浮き上がり
- 84 夏帽のした夭折の空透けて
- 85 露の葉に隠れて小さき虹はあり
- 86 一睡に五月と叫ぶ蛇口あり
- 87 ひるがほや梵天の穴つひに見ず
- 88 星明かりわづかに動く車庫の汽車
- 89 笹舟をそつと希臘へ押し遣らむ
- 90 わが帰郷まつ甲殻の朋がある
- 91 たんぽぽや駅舎は残る言葉のみ
- 92 ふところに猫より速くしやぼんだま
- 93 一度だけ敗れし國が枇杷の蔭
- 94 古地図にまだ夜が明けぬ村がある
- 95 畳屋よなほ美しき青の火事
- 96 揚ひばり雲にあずけし骨目がけ
- 97 天罰の音にをのくしたびらめ
- 98 春風のあと想像の孕みあり
- 99 日の庭に唐草模様あそばせて
- 100 巻き戻る夢の仕掛けが朝顔に